

高齢者・障がい者の住まいを考える

ケアリフォームシステム全国大会 in 沖縄

残存能力を生かす住環境を

体が不自由になったとしても、家で安心して楽しく過ごすことができれば生きる活力につながる。高齢者や障がい者、介護者にも優しい住まいづくりにはどんな配慮が必要か。第6回ケアリフォームシステム全国大会（主催：ケアリフォームシステム研究会・以下CRS）からポイントをチェックしてみよう。

高齢者や障がい者の自立を促す住宅研究・提案を行うCRSの全国大会が、11月16日、那覇市で行われ、施工会社やケアマネジャー、作業療法士らが多数参加。残存能力を生かす住宅改修

をテーマに、事例報告や福祉用具の展示が行われた。

会長の武藤俊之氏は、「2025年には3人に1人が高齢者という時代を迎える。今後ますます高齢者や障がい者さらには、介護する人にも、安心して快適



車いすからベッドへの移動が楽にできるリフトなど多数の福祉用具の説明も行われた

に暮らせる住環境づくりが不可欠に。施工会社やケアマネジャーをはじめ、作業療法士など、関連分野が連携しながら、住まいと福祉用具を結ぶ提案を進めていくことが大切」とあいさつ。

使い手の体長変化に対応し、可動するH型の手すりの設置例や、効果的な手すり設置の工夫などを紹介した。

「身体状況を把握して手すりを設置することはもちろんですが、設置の工夫次第で、やる気を引き出すこともできる。家の中にある手すりを使ってリハビリができた、その様子を家族が近くで見守れる部屋の造りにす

れば、本人の意欲にもつながります」と強調した。

このほか、CRS沖縄の会長を務める(有)ラムハウジングの川上優代表取締役は「かど社からも、残存能力を生かす」をテーマに改修事例が報告され、コメントーターの佐賀大学の松尾清美教授が自身の車いす生活での工夫も交えながら、有効な改修方法をアドバイス。福祉用具と住宅を適切に改善すれば、体が不自由であっても楽しく生活していけるようになる」とし、生活動作の詳細な確認、将来の身体機能の変化への考慮の必要性を説いた。また、車いすから介助なしで便座へ移乗する方法や、介助負担を軽減する福祉用具の使い方なども紹介された。

同研究会への問い合わせは、(有)ラムハウジング（電話109B・935・8808）まで。